

自立と共生の教育研究部会

I 研究のテーマ

『一人ひとりが主体となり 共に自立し、平等に生きる社会をめざすために』
～性差別のない社会、共に生きる社会に向けて～

II 研究テーマ設定の理由

1995年に、北京で開催された国連の第4回世界女性会議において「教育においてジェンダーの視点を認識することの重要性」が確認されてから18年が過ぎ、その間に国内においても、「男女共同参画社会基本法」の策定など法律上の整備がなされ、私たちを取り巻く社会の中でも、女性の社会参加に対する意識の変化が見られるようになってきている。

しかし、社会の風習・慣習に目を向けると、男女差別の考え方が地域や職場、家庭といった様々なところで今でも根強く残っている。私たち自身の中にも、「男が先で女が後」の順序、「男が主体、女が補助」の役割分担、「男は力、女は優しさ」の評価規準など、数値化されない関係が無意識のうちに染み込んでいるのが現実の姿である。

私たちは、こうした現実をしっかりと認識、確認していく中で、昨年引き続き性差別のない社会や男女が共に生きる社会の実現に向けて研究を進めていくことにした。子ども達が「男らしさ・女らしさ」の固定的な枠にとらわれず、一人ひとりがそれぞれの個性に自ら気づき、自分らしさを大切に、それぞれの存在を認め合って生きることをめざして、本テーマを設定した。

III 研究の経過と内容

1. 研究の基本方針

- ・学習会を通して共通理解を図る。
- ・合同指導案による授業研究を行い、テーマに沿って検証する。
研究授業後、各校へ持ち帰り、授業をして、実践報告をする。
- ・「性別で分けない名簿」の取り組みをする。

2. 経過と内容

今年度は、両性の自立・平等の根幹にある、誰にも必要な「自己肯定感・自己有用感」に焦点を当てて研究を進めた。まず、講師を招いて学習会を開き、自立と共生とは、自己肯定感とはなどについて、学習を深めた。その後、指導案検討を重ね、新田小の3年生対象に研究授業をおこなった。指導案検討の際にも、研究同人から、たくさんのアイデアが出た。新田小の対象児童の実態に即した指導案を創り上げ、授業をおこなった。研究授業には、研究同人が全員参加し、授業後は活発な意見交換をした。その授業を受けて、同じ指導案をもと

に、各校で実践をおこなった。実践後は、成果と課題について話し合いを持った。話し合いの中で、「担任も含めて、授業後穏やかでうれしい気持ちになった。」「子どもたちの感想の中に、友だちへの感謝の言葉があり、自分だけではなく友だちも大切に思う気持ちが高まった。」などの成果が上げられた。一方で、「高学年で、自己肯定感や自己有用感を持たせるためにはどのような授業を仕組んだらよいか。」という課題も出された。

- 4月11日(火) ・研究テーマ、サブテーマ 役員決定 研究計画概要決定
- 5月14日(火) ・春季教研還流報告 ・今後の研究の日程決定
- 6月18日(火) ・学習会 ・指導案について
- 7月31日(水) ・指導案検討(合同指導案持ち寄り)
- 8月16日(金) ・指導案検討
- 9月 3日(火) ・研究授業(3学年 新田小学校)
- 10月 1日(火) ・県教研レポート作成 ・合同指導案による、各校の実践発表
- 11月 5日(火) ・県教研報告
- 1月21日(火) ・反省とまとめ

共同指導案 学級活動指導案「みんなが輝いているために」

○本時のねらい

- ・友達のよいところに気づき、相手を大切にしようとする心情と態度を育てる。
- ・友達の見つけてくれたよいところを受け止め、自己肯定感を高める。

○展開

- 【つかむ】 1. ドラえもんキャラクターを使い「よいところさがし」をする。
2. 本時の活動の目的を確認する。

[ともだちのよいところを見つけよう。]

- 【考える】 3. 友だちのよいところをカードに書く。
4. 友だちにカードを渡す。
5. もらったカードを画用紙に貼る。

【深め・広げる】

- 6. 自分をふりかえる。
- 7. まとめの話聞く。

○評価

- ・友達のよいところに気づこうとしている。
- ・友達の見つけてくれた自分のよいところを受け止めている。

IV 研究の反省と課題

1. 学習会について

学習会を開き、これまでの歴史的経緯を学んだり、全国的な課題を知ることができたりした。毎年継続して、学習会を開いていきたい。

2. 共同指導案・研究授業案・一人一実践

今年度は、共同指導案を作り、新田小の3年生で研究授業を行った。共同指導案は、いろいろな学校のいろいろな考え方を入れ込むことができ、良かった。また、各校同一歩調で指導案を検討し、実践することができ、大きな成果となった。指導案を全体で検討し、共同指導案としたので、観点・成果・課題が明確だった。また、部会員が指導案の内容を理解して研究授業を参観したので、研究をより深めることができた。

研究授業の後、各校で共同指導案をもとに、一校一実践を行った。実践する学校・学年の実態に応じて、授業を行った。低学年と高学年での指導の仕方の違いについても考えることができた。また、それぞれの発達段階に応じて一つの指導案を実践活用できたことは、有効であった。共同指導案で授業することによって、自校の実態に応じた実践をすることができた。市の「自分についてのアンケート」で自己肯定感の低かった児童がいる中で、共同指導案による授業をしたことで、自己肯定感を高めることができた。一校一実践したここで、子どもたちの自己肯定感をさらに高めることができた。また、誰にでもできる内容の指導案にだったので、今後も活用していけるものとなった。同じ指導案で授業を行うことで、良い面、改善面が分かりよかった。

3. その他

「自己有用感」に内容を絞ったことは、焦点化されて良かったが、その他の内容（キャリア教育 性差別）の実践ができて良かったのか。「自己肯定感・自己有用感」を高めるとなると、いいところ探しの授業になってしまいがちだが、少し切り口を変えるなどして、ちがった形の授業ができればよい。子どもたちの自己有用感を高めるという研究テーマを常に意識して、子どもへの声かけ、学級経営をすることができた。継続していくことが大切だと感じた。

・今後も研究を継続していくことが重要である。また、自己有用感だけで終わらず、自立をめざした取り組みにつなげていくことが、今後の大きな課題である。